

レースっていいよね
第41回 「ごめん。」の巻

事故った。その経緯は「ちょっと聞いてくださいまし」にて触れたが、とにかく落ち込んでいる。愛車、シトロエン・AXはその存在が自分自身に等しかった。

元はと言えば、かの由良拓也氏より頼み込んで譲って頂いたのだが、それ以来どこへ行くのも何をするのも一緒だった。言ってみれば、それは自動車という形をした、ある時期の私自身の人生、そして思い出の記録「そのもの」でもあったのである。

今、半身を奪われたような気分ではあるが、反して仕方がない、とも考えている。

「色即是空」

あらゆるモノに永遠など無い。カタチあるものはいずれ無くなる。実際、最近AXを運転しながら、しばしば「振り回し過ぎているな」とは感じていた。それは、オートバイで走る感覚に近かった。

バイクで走る時、自身の運転技術レベルはさておき、快樂のために「もっと奥へ」「もっと早く」と、自然にアップペースで走る。転んでも良い、とさえ感じる瞬間がある。

いつしか「それ」をAXに求めていた。おそらく、私は何に乗ってもそういう傾向はあるのだろう、しかし、アクセルの瞬間、ブレーキの瞬間において、波長の合わない乗り物は多い。それはパワーや、ハンドリング、といった諸元では表せない感覚である。

簡略的には「オモシロイ」という表現が最もシックリくる。

軽量、コンパクト且つシンプルであれば、例えパワーが無くともそれなりに乗り物は楽しいものだ。勿論無さ過ぎるのは面白みに欠けるが、トータルパッケージングを超えたパワーは特に必要無い。

だから例えば、軽トラは「オモシロイ」部類に入る。しかし、乗用車としては不足する点も多い。それは居住性であったり、その他もろもろ。デートに使えない、ってのも重要だ。

いや、個人的にはそれはそれで楽しそうに感じるけど、果たして、そのショボさを容認できる女性は何人いるだろう？

さておき、そういった条件全てにおいて満足し得るクルマがAXだった。

ボロだったけど、よく走った。シートは完全にリクライニングしなかったけど、その座り心地は秀逸だった。パワステは無かったけど、車重780kgの軽量と猫足からは、ダイレクトで許容量の多い、最高のドライバビリティを感じることができた。お洒落な街にも絵になった。(と思う)

パリジャンが未だにAXで小粋にパリの街を疾駆する理由はこんな所にもあるのだろう。

確かに、今時のクルマに比べればシンプル過ぎるほどシンプルだったし、それこそがAXの設計意図であったに違いない。今思うのは、これほど「運転するのが楽しい」と心から感じられるクルマにはそう滅多にお目にかかれない、ということである。

最近、12万キロを越えてさすがに、オイル漏れ、ブレーキ、各ベルト廻りに不安を抱えていた。走行中、タイミングベルトが切れてエンジンが再起不能になるのでは？ という意識はあったが、よもやクルマそのものが再起不能になるとは想像もしていなかった。

まさに人生一寸先は闇、である。

しかし、そうなった原因は私自身にある。決してクルマのせいではない。それどころか、車幅が変わるほどのクラッシュにも関わらず、私がこうしてピンピンしているのはAXのストラクチャ性能の賜物であった筈だ。

私はAXに、ヒトに感じるのと同じような感情を抱いていた。